

地球日記

沖縄発 JICA ボランティア

吉谷謙介

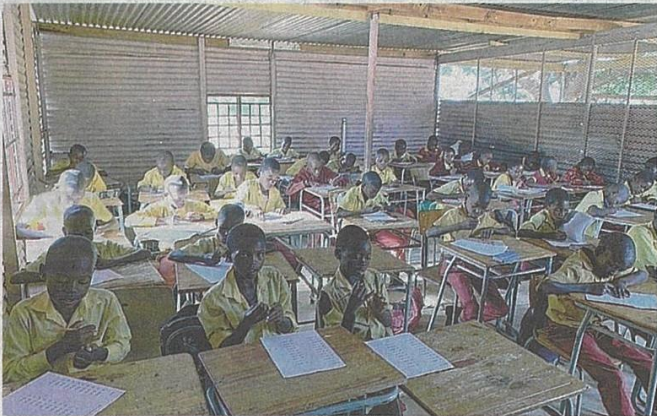
多民族文化 言葉は誇り

今年も庭のグアバの木に大きな果実が実り、今季の雨の多さと再派遣されて1年がたったことを実感する。「フララボ」「モロ」「マティサ」「ウハンデット」「コンニチハ」。町を歩いているとさまざまな言葉で声をかけられる。全て日本語の「こんにちは」に当たるあいさつだ。

多様な言語が日常に飛び交うが「コンニチハ」が含まれているのはとてもうれしい事実であるとともに、この町での生活の長さを実感する瞬間でもある。

私はアフリカ南部、ナミビアの首都ウィントフックから約250キロ離れたオチワロンゴで、小学校教育の海外協力隊員として州の教育局で活動している。2020年1月に始まった私の協力隊生活は凶つたようなタイミングで訪れた新型コロナウイルスと切っても切れない関係となった。

赴任して2カ月足らずで先の見えない緊急一時帰国。再赴任後の任地変更。移動規制、国策によるロックダウン、2度目の一時帰国…。挙げればきりのないほど、未曾有の事態だらけであった。思い返してみると、当初はアジアの問題とされていた新型コロナ



現地の小中学校。4年生の算数の授業風景＝2020年2月

●412

ナミビア 尊敬の気持ち 忘れずに

ウイルスも瞬く間に世界中の問題になっていき、アフリカでも対岸の火事ではなくなり、かつて散見されたアジア人に対する差別的な発言も再赴任後には既になくなっていった。

アフリカという地は実に興味深い。私は主に小学校の算数教育に関わる仕事をしているが、算数の学力はその背景にある文化や生活が密接に関わっている。

相手の生活、文化、環境などの実情を知ることより大きな影響を与え合うことができる。日本人の自分とナミビア人である相手の心がつながる瞬間がとても大切で、それは喜びでもある。それを大きく感じる瞬間が「言葉」なのだ。

ナミビアには実に多くの民族が存在し、その数だけ言語がある。家で話す言語、学校で話す言語、ご近所さんと話す言語、町中で話す言語、それぞれが全て異なることもあり、国民のほとんどが幼い頃から複数の言語を操っているナミビア人にとって「言語」は各民族の誇りでありアイデンティティである。

「あいさつ」という日常にあふれる交流を自分の言語で交わすことは誰にとってもうれしい瞬間である。これからも尊敬と尊重を忘れずに「知る」ことを大切にされた任期を全うしたい。言葉がつながる瞬間は心がつながる瞬間なのだ。



現地の小学校で出張授業を行う筆者（右）＝2021年12月

よしたに・けんすけ 1992年生まれ。北海道出身。2016年に琉球大学卒業後、竹富町立船浮小中学校、鳩間小中学校などに勤務。2020年1月よりナミビア派遣で海外協力隊に参加。